

学内広報

2022.9.26

no.1562



UTokyo Green Transformation



GXのロゴが
できました!

志ある卓越。



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

600人の博士課程学生を支援する大型プロジェクト

SPRING GXの現在

オンライン授業を縁の下で支える学生たち

uteleconのサポーターをご存じですか

600人の博士課程学生を支援する大型プロジェクト

SPRING GXの現在

昨年10月に始まった博士課程学生支援プロジェクト、SPRING GX。科学技術振興機構（JST）の次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）に採択されて東大が進めるこのプロジェクトでは、600人の学生が経済的支援を受け、グリーントランスフォーメーション（GX）を先導すべき高度人材として育成されています。ここでは、事業統括としてSPRING GXを牽引する大越慎一先生に、企画の背景、開始に至る経緯、学生たちへの思い、現況などについて紹介いただきました。SPRING GXで学ぶ学生の研究事例の一部も共有します。



SPRING GX事業統括
大越慎一（理学系研究科教授）

※1 SPRING GXタスクフォースメンバー
齊藤延人理事・副学長、川崎雅司教授（工学系）、山本智教授（理学系）、津本浩平教授（工学系）、徳永朋祥教授（新領域）、熊田亜紀子教授（工学系）

※2 研究奨励費（生活費相当額）216万円＋研究費34万円

※3 修博一貫の国際卓越大学院教育プログラム



対象とする学問分野は、人類の営みと関係する分野、すなわち全分野です。

40回超の会議で企画を立案

昨年6月、齊藤延人理事からSPRINGプログラムについてお話があったのが発端でした。博士課程進学者が減っている現状を慮って国が始めた170億円規模の支援策です。執行部で議論し、大学ごとに一人しか出せない事業統括の候補として選んだので、GXをテーマに考えてみてほしいとのことでした。長く関われる、国際的ビジョンがある、産学連携や教育活動の実績があるなどの要件を満たす教員とのことで要請をいただきましたが、支援対象として600人を考えていると聞いて愕然としました。申請期限まで3週間しかなく、タスクフォース※1を組んで大急ぎで書類作りに入り、採択までに40回以上の打ち合わせを重ねました。

CO₂削減技術を軸に温暖化を抑制し社会を変革する本来のGXには少し科学技術寄りの印象もあります。議論するうち、貧困やダイバーシティまで含めて考えないとGXは困難だと気づきました。たとえばアフリカの子どもの就学率を調べると、女性は男性の半分以下。人類の課題に立ち向かうのに教育は不可欠ですし、IoTやDX、法整備や哲学も重要です。つまりGXには全ての学術が関係すると考え、全部局の学生が参加できるという骨格を決めました。

一人年間250万円以上の支援※2を受けるわけですから、自覚をもって研究に没頭するのが学生の務めです。負荷が増えて学位取得が遅れては本末転倒なので、最小限のデューティを課すようにしました。学生は安心して専門性を深め、多分野の専門家が

議論する場に参加しながらネットワークを構築し、地球規模の課題に対する解決方法を提案する、というシナリオです。

必修の基幹プログラムとして、GXを牽引する専門家によるGX俯瞰講義、GXに貢献した創発的研究者によるGXインスパイア講義、600名でブレインストーミングを行うグリーン未来交流会の3つを用意しました。講師の講演の後、600人の学生をランダムに10グループに分けて議論する時間を設けているのが特徴。統括オフィスのスタッフがモデレーターを務め、約3割ほどいる英語話者のために同時通訳と自動翻訳も活用して議論しています。

興味に応じて学生が選択するプログラムとして、自発的融合プロジェクト研究、国際会議派遣、海外派遣、産学連携インターンシップ、セルフプロモーションビデオ制作も実施しています。ブレインストーミングなどから生まれた挑戦的・分野融合的なアイデアに基づく共同研究提案に最大50万円を支援する自発的融合プロジェクト研究や、海外で行われる研究や学会への参加、YouTubeで自分の研究を紹介するなどの活動を展開してもらいます。海外派遣プログラムでは年200人の派遣を見込んでいましたが、コロナ禍の影響でまだ50人程度に留まっており、その点だけは残念です。

学生選考については、19のWINGS※3にご協力いただいています。SPRING GXは博士課程の3年間で基本のため、学生はWINGSのどれかに準会員として申請し、各WINGSが第一段階選抜を、統括オフィスが第二段階選抜を行います。WINGSが運用する産学連携ラボインターンや国際キャリア研修やダイバーシティ教育などのコンテンツも提供いただき、高度スキル養成プログラムの枠で学生が選んで参加しています。WINGSの協力あってのSPRING GXです。おかげさまで1回目の募集では1000人の応募があり、今秋の募集でも定員の3倍を超える申請をいただいています。

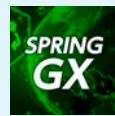
地球規模の課題に東京大学が有するアセットを“全投入”
“東京大学の方針と合致”

人類の最重要課題の解決に資する
人材を、規模感を持って
あらゆる分野に輩出



SPRING GX生の研究紹介事例

SPRING GXで学ぶ学生が自分の研究内容を約3分で紹介する動画や、大越先生や熊田先生がプログラムで開催した講義の一部をYouTubeで配信中です。その中からお二人の事例をダイジェストで紹介します。



詳細はSPRING GXの公式YouTubeチャンネルでご確認ください→

安心して基礎研究を進めよう

各講義で行う議論からは、学生たちの高いモチベーションが伝わります。先日GXインスパイア講義に登壇した薬学系の後藤由季子先生は、違う分野の学生から刺激を受けたと話していました。体内時計の話の際に、宇宙の研究をしている学生が、細胞は放射性崩壊を知っているのではないかと指摘したり。嫌な記憶を消す薬の話の際には、悪い記憶をポジティブなものに変えるような心理学的制御はあり得る、と哲学畑の学生が発言したり。専門性を持つ者同士の議論が新しい学術や課題解決につながるかもしれない、と手応えを感じています。

基礎研究は基本的に狭く深く進めるものですが、社会からは役に立つ研究を求められがちで、博士課程の学生はそこに不安を抱えています。自分の研究が役立つとは思えない場合、このままがんばっていいのかと悩んでしまうものです。私も基礎研究者の一人です。化学の基礎研究から生まれた新材料の中にたまたま使えるものがあったので、結果的に応用研究や産学連携も進めましたが、最初から役立つものを作ろうと思っていたわけではありません。SPRING GXという横のネットワークで社会とのつながりを保ち、安心して専門性を深めてもらいたいです。社会の課題についてはSPRING GXで話す仲間がいるから、あとは自分の専門分野の研究をひたすら進めれば、研究をがんばっていれば話を聞いてくれる人はいるんだ、という状況を学生に提供し続けたいと思います。

在宅看取りにおける多職種連携の鍵とは？



日本では約6割の方が自宅で最期を迎えることを希望していますが、実際に最後まで自宅で過ごしている方の割合は約1割程度で、7割を超える方が病院で最期を迎えています。この状況に変革をもたらすには、自宅で質の高いケアを提供できる体制の構築が必要です。そのため鍵が、ケアを提供する専門職間での連携です。私は、自宅で療養する人々をケアする専門職同士が互いの専門性を発揮して適切で質の高いケアを提供するにはどのように連携すればいいかを研究しています。住み慣れた地域で最期まで過ごしたいと希望する人が思いを実現できる世の中を作りたくです。

自宅療養者をケアする専門職同士が互いの専門性を発揮しながら適切で質の高いケアを提供するための新たな知見が得られれば、自宅で最後まで過ごしたいと希望する方々の思いを実現できる世の中を作る一助となると考えています。これはSDGsの優先課題である健康・長寿の達成に位置付けられます。SPRING GXを通じて、多様な分野の専門家と協働しながら、たとえば経験の浅い専門職であっても質の高いケアを提供できる新たな方策を提案したいと考えています。

災害につながる寒冷渦の維持メカニズムの解明



私の研究対象は寒冷渦と呼ばれる渦の維持メカニズムです。寒冷渦は上空を流れる偏西風の蛇行が深まることで発生する低気圧で、ほとんどの場合その内部に寒気が伴います。上層では明瞭ですが、地上付近では不明瞭なため、普段ニュースで見る天気図にはあまり明瞭に現れません。寒冷渦が接近すると、大気が不安定になりしばしば激しい雷雨になります。寒冷渦が同じ地域に長く居座ることは災害リスクが続くことを意味します。寒冷渦の維持メカニズムの解明は喫緊の課題ですが、完全には理解されていません。私はデータ解析や数値計算を用いてこのメカニズムの解明に取り組んでいます。

私の研究では地球環境を直接的に扱うため、GXの推進に大きく寄与することが期待されます。いまは「現在気候」における解析を進めていますが、今後は「将来気候」下における大気のシミュレーションチェックをもとにした解析も行う予定です。近年、気候変動に伴う気象災害の激甚化が懸念されています。「将来気候」下において寒冷渦の挙動がどのように変わるのかにも着目し、全世界に新たな知見を提供することを目標に掲げ、SPRING GXを通してGXに貢献していきます。



uteleconのサポーター をご存じですか?

（東大のオンライン授業を
縁の下で支える学生たち
とその学生たちを支える教職員たち）

東大のオンライン授業とWeb会議を支えるuteleconプロジェクトが、8月9日に全体会を開催しました。これまでもオンラインでは定期的に行っていましたが、対面も含めた形式で行うのは学生サポーター組織の発足以来今回が初めて。会場となった理学部1号館の教室には約25名のサポーターと関係者が集まり、オンラインで参加したメンバー約20名とともに、活動状況を共有し、交流を深めました。



金子亮大さん（総合文化研究科修士2年）「情報基盤センターのECCS相談員^{*}をやっていた縁で、2020年の発足当初からコモンサポーターとして、その後はuteleconサポーターとしても活動しています。学年が上がるにつれてつきあいが狭くなっていくものですが、こうした活動を通して部局を越えた交流ができるのがいいですね。職員との交流機会も増えるので、大学運営の実情を覗いたりそこに少し関わったりできるのも面白いです」

^{*}ECCS端末の相談に対応するのが任務



佐藤 暁さん（理学系研究科修士2年）「昨年1月、OES^{*}立ち上げの際に研究室の先輩から聞いて応募しました。コロナ禍が続く中、ちょうど新しいコミュニティを探していた頃で、著作権の勉強ができていいかと思ったんです。「東大TV」や「UTokyo OCV」の業務を通じて東大の研究者の様々な授業に触れられるのが楽しいです。人類が積み上げてきた学問という叡智を世界に発信する取り組みに少しでも貢献できるかと思うとやりがいを感じます」

^{*}右頁上の表参照



川添友大さん（工学部4年）「昨秋、家庭教師のバイトが終わった頃に学科のSlackで田浦先生のメッセージを見てコモンサポーター^{*}に応募しました。大学全体のシステムに興味があり、自分の研究にもつながるテーマでした。やってみて、常にわかりやすい対応を心がけている人が多いことに驚きました。全構成員が知っていて、ITのことならなんでも相談したくなるような窓口が理想。職員も含めて全構成員が相談していい窓口だと知ってほしいです」

^{*}右頁上の表参照



中條麟太郎さん（文学部4年）「コモンサポーターとして活動するなかで、意見を出し合って集合知を生むための方法を考えるようになり、アクティブラーニングが専門の吉田壘先生と話し合ううちに生まれたのがLearnWiz Oneです。東大IPCの1stRound プログラムで得た資金を元手に起業しました。uteleconの活動から生まれたこのツールはベータ版が無料で使えます。全学の皆さんにオンライン活動の長所を引き出してもらえたら嬉しいです」

「ゆっくりしてってね!!!」

全体会でまず登壇したのは、uteleconの学生サポーターを立ち上げ時^{*}からまとめてきた情報基盤センター長の田浦健次朗先生。コロナ禍の下で何とか乗り切ってきたこの2年を振り返り、今後もユーザー目線を忘れずがんばろうと呼びかけました。そして、尽力してきたメンバーたちへの感謝のしるしに、直前に自作したという動画を披露。動画投稿の世界で有名なキャラクター（霊夢と魔理沙）と合成音声によって構成した動画で、uteleconの活動と意義を再確認するとともに、「（今日は）ゆっくりしてってね!!!」と皆をねぎらいました。

続いて、3人のオンライン教育支援サポーター（OES）と2人のコモンサポーターからそれぞれ活動状況の紹介がありました。

英訳に著作権に社内報まで

OESは、記事班、英語班、情報更新班、OER著作権班、コミュニケーション班に分かれます。日本語の記事を書くのが記事班で、それを英語にするのが英語班。記事をuteleconポータルサイトにアップロードするのが情報更新班です。情報更新班は、原稿をウェブにふさわしい形式に変換し、英語版の画像を作成するのが主な作業。日本語記事用のスクリーンショットは日本語を含む場合が多く、それを英語に置き換え


たり、画像処理ソフトで修正を施したりする必要があるそうです。OER（Open Educational Resources）は教材を誰もがアクセスできるようにする運動のこと。教材をインターネットで公開するには著作権の処理が必要で、それを担うのがOER著作権班です。たとえば、uteleconの記事でアプリのロゴ掲載は問題がないか、個人情報への配慮は適切か、出典は明記されているかといったことを確認し、アプリの企業や記事の執筆者に問い合わせる作業を行っています。コミュニケーション班は、全体ミーティングの運営と、組織内のコミュニケーション促進が役目。社内報のような存在の広報メディア

^{*}utelecon開始の経緯は本誌1536号を参照ください

uteleconプロジェクトと学生サポーター

全学の構成員（学生・教員・職員）

全学の情報システム利用をワンストップで支援

 <p>utelecon プロジェクト</p>	<p>学生スタッフ コモン サポーター 約 40 名</p> <p>サポート窓口での 現場対応</p>	<p>学生スタッフ utelecon サポーター 約 10 名</p> <p>サイトのコンテンツ 作成など（主にシス テムの視点から）</p>	<p>学生スタッフ オンライン教育 支援サポーター (OES) 約 30 名</p> <p>サイトのコンテンツ 作成など（主に教育 の視点から）</p>
	<p>情報基盤センター</p>	<p>情報システム本部</p>	<p>情報システム部</p>
<p>utelecon ポータル</p>	<p>大学総合教育研究センター</p>	<p>教養学部</p>	<p>.....</p>



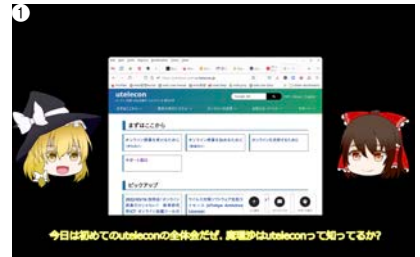
田浦健次朗教授（情報基盤センター長）
uteleconを0から育て上げてきたリーダー。全体会では、ネットで人気のキャラクターを使った自作動画でこの2年間の感謝のメッセージを伝えました。



加藤菜穂さん（大学総合教育研究センター高等教育推進部門学術専門職員）
2020年9月に着任。「だいふくちゃん通信」を担う学生など、OESのOER班と記事班に関する業務を主に担当。



竹内 朗さん（情報システム本部技術補佐員）
全体会の総司会を担当。昨年度までは学生メンバーの一人として、本年度からは職員としてuteleconサポーターを牽引してきました。



「OES通信」を月1回ペースで作成してメンバーに配布しているそうです。

レビュー制度で回答文を磨く

コモンサポーターは、uteleconポータルサイトを見た利用者の問い合わせに対応するサポート窓口業務を行っています。対応に使うツールは、チャット、音声通話（Zoom）、メールの3種。すぐ答える／詳しく調べてから答える、学生だけで対応／教職員を含めて対応、テキスト／音声／画像と、各々のツールの特徴を活かしながら適宜対応しています。特にメール対応の場合には、相談した方になるべく負担をかけずに解決することを目指しているそうです。回答文案は必ず「レビュー」のプロセスによって、内容に間違いはないか、誤解を招く表現はないか、より適切なアプローチはないかなどの検討を経るフローが確立されています。全体会の発表では、実際の問い合わせをもとにした事例も紹介されました。

この問い合わせでは、新入生からの問い合わせということもあって、学内の複数のシステムを混同している様子が文面から読み取れました。そこで、担当教職員によるログの調査や誤解を招く表現についてのレビューを経て、無事問題解決に至ったのだそうです。

発表後の意見交換では、昨年度総長大賞受賞の中條麟太郎さんがモデレーターとして登壇。コモンサポーター時代の経験を糧に開発した注目のEdTechツール「LearnWiz One」を使って、オンライン経由を含む参加者から多くの意見を集め、共有して活発に話し合う姿勢を体現しました。その後、ランダムにグループごとに分かれて話すブレイクアウトセッション（15分×2）を実施し、これまでオンラインでしか会えなかった仲間と対面で話す意義を味わったサポーター一同、教職員とともに東大のオンライン活動を支えている陰の貢献者たちです。



- 1 田浦先生が作成した動画より。「東大の情報サービスをどう発展させようわかりやすく親切にサポートするかの取り組みなんだぜ」
- 2 OESが支援する「東大TV」[UTokyo OCV]のマスコット、ぴびり(左)とだいふくちゃん。
- 3 「OES通信」より。トピックス、成果物、グッドプラクティス、予定などの紹介のほか、お好み焼き情報のようなやわらかネタも！
- 4 全ての意見を満遍なく表示するアルゴリズムを搭載。新しい民主主義の鍵がここにある！

教養教育の現場から

第53回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

科学と社会の関係を10人の講師に学んで議論

／「現代科学技術概論I」

総合文化研究科
教授

大杉美穂



——科学技術インタープリター養成プログラムの必修科目となる授業ですね。

「様々な分野の研究者と、研究者ではない立場から研究に携わる有識者たちが、ゲスト講師として講義を行い、その内容について皆で議論するオムニバス形式の授業です。私は2018年度から参加していき、講義を行うのに加え、担当教員の一人として他の回にも参加しています。私は基礎研究者で、社会の役に立つために研究をするという視点は持っていませんでしたが、参加を機に自分の研究分野で社会との接点があるとしたら何なのかを考え、生殖補助医療をテーマに選びました。所属する日本卵子学会で得た知見に加え、一般の人が生殖補助医療についてどのように情報を得ているかを知るために、新聞やWeb上にある情報を調べて話題提供しています」

高度生殖医療の現状を紹介

——今年度の大杉先生の講義は7月5日にオンラインで行われました。

「妊娠のメカニズムや不妊治療の概略と歴史を確認した後、高度生殖医療の現状について紹介しました。近年、卵子の凍結保存技術が進み、福利厚生の一環として社員の卵子凍結費用を支援する企業が

日本でも現れています。今は出産せずに働きたいが将来のために健康な卵子を保存しておきたいという女性に選択肢を示すことが、優秀な人材を確保したい企業にとつての価値に繋がっているわけです」

——大学にも当てはまりそうな話です。

「今春、日本で不妊治療の保険適用が始まりましたが、治療の現場では新たな課題も生じています。不妊治療で生まれた子が出自を知る権利、ヒトのゲノム編集の是非、出生前診断と中絶決断といった問題も避けて通れません。不妊治療の歴史を調べると、奴隷を使って人体実験をしたとか、女性に情報を開示せず人工授精していたという事実も出てきます。当時としては問題がなくても、今見ると問題だらけです。昨年の講義ではブタの体内でヒトの臓器を作る研究の話もしました。こうした実験は、以前は禁止されていましたが徐々にできるようになりつつあります。時代によって評価は変わるわけで、現在私たちが行っていることも、将来振り返ると問題があると見なされるかもしれません。授業を通じて、そうした視点を持つことの意義に気付かされました。よくあるアウトリーチ活動は私にはしっくりこない部分があったのですが、研究成果が社会に及ぼす影響を意識

した上で基礎研究に取り組むことが重要だと考えると腑に落ちました」

教員にも気づきを与える授業

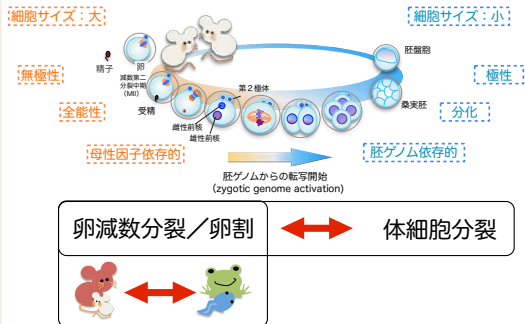
——他の回で印象的だったことは？

「障害の社会モデルという考え方があるとか、研究者が楽しんでいけば情熱は周囲に伝播するとか、樹木の伐採は必ずしも悪ではないとか、メディアではシナリオに合致する話だけが求められるとか……私には発見ばかりです。通常は接点のない異分野の学生の話を開けるのも刺激になっています。このプログラムを受講する大学院生は、モチベーションが高いのはもちろんですが、言葉にして表現するのが得意で、各々の分野の専門家としてのただの感想とはひと味違うコメントや情報をくれるんです。入学時のガイダンスにダイバーシティ教育が組み込まれていて履修登録に必須である海外大学の例とか、ヒトと動物のキメラをどう受け止めるかについての日本語の論文も出ていたよとか。前期課程の生命科学の講義に出ていた学生が大学院に進んでこのプログラムを選択し、授業で再会したこともありました。学生の皆さんより私のほうが楽しんでいる授業かもしれませんね」

総合文化研究科広域科学専攻／理学系研究科生物科学専攻 大杉美穂

研究テーマ

哺乳動物の受精・初期胚発生に特異的ななくみや制御は？



第12回の講義で使われた研究紹介スライドより。かわいいイラストも大杉先生のお手製 (MacのKeynoteを使用)。

各回とも講義後に約30分のディスカッションを行うほか、直前3回分を振り返って議論する回も設けているのが特徴的。

ゲスト講師一覧	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
	松田恭幸 (総合文化研究科)	蔵治光一郎 (農学生命科学研究科)	塚谷裕一 (理学系研究科)	熊谷晋一郎 (先端科学技術研究センター)	ディスカッション／ふり返り	高祖歩美 (国立遺伝学研究所)	野上謙 (理学系研究科)	宮本英昭 (工学系研究科)	ディスカッション／ふり返り	多久和理実 (東京工業大学)	須田桃子 (NewsPicks)	大杉美穂 (総合文化研究科)	ディスカッション／ふり返り

いちょうの 部屋

学内マスコット放談



今回のゲスト こまっけろ

駒場祭公式マスコット

誕生日は11月25日。好きな食べ物はぎんなん。好きなことは散歩で、苦手なことはジャンプ。ウナギヌを思わせる尻尾は子どもと大人の間である大学生を暗示

いちょうくん 黄色だし、尻尾があるし、腹に銀杏模様もあるけど、カエルだよ。言葉はしゃべれる？

こまっけろ 日本語はしゃべれるよ。おさんぽの途中にひろった帽子をかぶったらしゃべれるようになったんだ。住みかは駒場池だよ。けろけろ。

い 2007年から駒場祭のマスコットを務めているんだってね。ふだんはどんな活動をしているの？

こ TwitterとInstagramでぼくの日常をおとどけているよ。冬眠明けの春にはさくらをバックに、夏休みには札幌の時計台の前でも撮ったんだ。五月祭公式マスコットのめいちゃんや「だるまさんがころんだ」で遊んだのも、楽しかったなあ。負けちゃったんだよね。けろけろ。

い あのかわいい羊さんと友達なの？ いいなあ。めえ。

こ 地域のイベントに参加することもあって、10月9日には目黒区民まつりに行くし、10月23日には下北沢で子ども向けワークショップをやる予定だよ。まんげきょうやおめんを作ったり、ボール投げゲームをやったりするから、遊びに来てほしいなあ。けろけろ。

い 地域連携も重視とは、マスコットの鑑だね。さて、今年の駒場祭は11月18～20日だけど、どんな感じ？

こ 今年のテーマは「あかねさす」。みんなのお祭りに向ける想いで、秋の駒場がきらきらかがやくよ。この2年間はオンラインのみだったけど、今回は対面ありのハイブリッド開催だから、260人くらいいる委員のみんなは気合じゅうぶん。もちろんぼくも、オリジナルのえかきうたで踊るこまっけろダンスの練習に余念がないよ。けろけろ。

い まーるいおいけがありましておやまがふたつたちましたっってやつだね。歌まであるなんて、一流！

こ この号が出るころには投票で選ばれた第73回駒場祭公式テーマソングが発表されているから楽しんでね。当日は、ぼくがみんなといっしょにおさんぽする「こまっけろパレード」がオススメ。当日は委員のみんなと同じはっぴを着たぼくのぬいぐるみなど、たくさんグッズがあるよ。LINEスタンプの新作も出るから、みんな使ってね。けろけろ。

い 現地でもオンラインでも買えるカエルだね。けろけろ。過去の駒場祭り



<https://www.komabasai.net/>

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

第20回

工学系研究科修士2年 荻野紗央

「ここにあるもの」を発信する力

若狭湾に面する福井県小浜市は京の都に食材を納める「御食国」として栄え、独自の食文化や古都の文化を色濃く受けた街並みが今日まで存続する一方、近年は人口減少が深刻です。

そのような中、小浜市は北陸新幹線開通を控え、新たな関係人口の創出を目指しています。今回の活動では、小浜市が志す地域固有の豊かな自然・文化とICT/IoT等の最新技術が融合した「スロー&スマートシティ」の形成に向けた取り組みの提案を行いました。

私たちはまず資料を参考に市の「地域資源」分析に取り掛かり、「水産養殖業」「釣り観光」「寺社等の歴史資源」をそれぞれ活用したプロジェクトを考案すると決



若狭湾を背に。この地域には人魚伝説がある

めました。ただそれは文字や写真のみの情報で、実際の空気感はわかりません。一刻も早く現地に伺いたかったものの、COVID-19の影響で訪問が叶ったのは活動開始から半年後でした。

現地をこの目で見て、私たちは想像を上回る数々の魅力に驚きました。食べ物、特に海産物はどれも美味で、京都や奈良より規模は小さくとも特徴ある寺社や祭事が多く残っていました。そしてこれらの魅力は、地域住民の方にとっては至極当たり前のものでした。



若狭塗箸作り体験。しばし無言でやすりをかける

そこで気づいたのが、「訴求方法」の重要性でした。小浜市の魅力は確かに存在するにもかかわらず、その多くは現地に行かなければ知る事ができません。

その魅力をどう活用・広報し、独自性と採算性を確保するかが重要なのです。私たちはこれらを意識した提案を行いました。例えば小浜市で盛んな養殖業を中心に据えた地元の人も観光客も楽しめる養殖業関連のアクティビティや、イカ釣りの聖地である小浜市に来る釣り人専用の「仮想通貨」を活用した釣り人コミュニティの形成と経済活動の促進、寺社等の歴史資源の魅力「ユニークベニュー」として発信する国際学会の誘致などです。さらに小浜の新たな玄関口である新たな新幹線駅をプロジェクトの集積地として提案しました。

どんな地域にも必ず光るものはある、それを探して肌で感じ、発信していくことが地域創生の始まりではないか——これが今回の活動の一番の学びでした。

※メンバーはほかに石井明日夏（総合文化研究科修士修了）、中小路健（工学系研究科修士修了）、安達萌（医学系研究科修士修了）

ワタシのオシゴト 第196回

RELAY COLUMN

社会科学研究所
総務チーム(研究協力担当)

井上美里

器用貧乏? 良く言えば多芸多才!



社研入口にて、玄田所長のイラスト(自作)と共に

社研の研協担当2年目となります。これまで経理、国際、学生支援、環境安全、海外研修に私企業研修と、様々な業務を渡り歩いてきましたが、とうとう研究協力にも手を出すことになりました。

社研は文系の小さな研究所なので、研協担当はわずか3名で、科研費や共同研究、協定、研究員の受入れ、研究倫理、紀要や年報の発行等と多岐にわたる仕事をこなす必要があり、意外と(?)忙しいです。しかし、先生方との距離が近く、オンライン事務室(昨年度業務改革総長賞理事賞!)で相談してくださったり、会議で意見を求められたりと、やりがいを感じる毎日です。

プライベートでは野球好きの8歳と甘えん坊の5歳の男の子に振り回されつつ、職員を中心とする楽団でバイオリン等を演奏。ピアノやトランペットも練習中です。公私ともに充実していますが、この頃、遠近どころも目の焦点が合わなくなってきました。フラフラせず、絞っていかないといけないのかもしれないかもしれませんね。



子供と一緒にオンステージ(だんご三兄弟)

得意ワザ: イラスト、似顔絵

自分の性格: 裏表がない

次回執筆のご指名: 武林昭子さん

次回執筆者との関係: 旧学内テニス仲間

次回執筆者の紹介: 東大事務の明日を担う頼れる後輩!

ぶらり
構内ショップの旅

かどやてらす @本郷キャンパス の巻

宇和島鯛めし始めました

2020年11月、東京大学病院地下一階にオープンしたレストランかどやてらす。愛媛県宇和島に本店を構える、かどやグループが運営するこちらの店舗では、愛媛県の郷土料理から麺類などの軽食、そしてデザートまで食べることができます。

一押しは、8月下旬にランチメニューに加わった「宇和島鯛めし膳」(1,680円)。毎日宇和島から空輸で届く伊達真鯛というブランド鯛を使っています。ぷりぷりの新鮮な鯛のお刺身と海藻などを、生卵が入った出汁に絡ませ、それを白米にかけて食べるこの郷土料理。絶品です。同じく伊達真鯛を使った「真鯛のあら炊き定食」(1,350円)は、かどやに代々伝わる調合で鯛の頭を甘辛く煮た伝統の一皿です。

高齢のお客さんが多いため、多くの人に馴染みのあるメニューも揃えているそうです。定番の中華そばや生姜焼き定食、そして鶏のから揚げ定食などが根強い人気だとか。かどやてらすに寄ることを楽しみに病院に来ているお客さん



ホール主任の二宮さん

もいるそうで、「美味しいものを食べて、気持ち的にも元気になってもらえると嬉しいです」とホール主任の二宮隼一さんは話します。

狙い目は午後の3時以降だそうです。ランチを求めるお客さんの波も落ち着き、ゆったりとした時間が流れる店内で、軽食やお茶を楽しむことができます。お得なドリンクとケーキのセット(600円)もあるので、カフェとしてもぜひ利用してほしいと二宮さんは言います。

店頭で販売している3種類のお弁当とカツサンドは、職員証を見せると100円引きになります。電話でのお取り置きもできるそうです。本郷キャンパスの山上会館の地下一階にある、同じグループの四季料理かどや山上亭はしばらく休業していましたが、10月に再開する予定だそうです。



ブランド鯛を使った宇和島鯛めし膳

営業時間●
モーニング:
9:30-11:00
ランチ:
11:00-17:00

www.kadoya-taimeshi.com/kadoyamanage/shoplist/kadoyaterrace/

インタープリターズ・第181回 バイブル

総合文化研究科 教授 松田 恭幸
科学技術インタープリター養成部門

社会と科学の間の「不気味の谷」?

いきなりですが、上橋菜穂子さんのファンです。

活字化された作品はすべて読んでいますが、一番好きな作品はやはり「守り人シリーズ」です。仕事が行き詰まっているときや気にかかることがあるときでも、一度読み始めるとあつという間に引き込まれてしまい、時間が経つのを忘れてしまいます（ここでさりげなく原稿が遅れたことの言い訳をしています）。上橋さんの他の作品も大好きで、読み始めると止まらないのも同じなのですが、私にとっては「守り人シリーズ」が一番相性が良いというか、小説の中の世界に「すつ」と入り込める作品のようです。

なぜだろうと思っていたのですが、ある日、ロボット工学における「不気味の谷」現象に類したことが小説の世界にもあるのかも知れないと思いました。「不気味の谷」現象とは、ロボットを人が見たときに、その外見や動作が人に似ていくにつれて親近感が増していくが、あるところまで似てしまうと逆に違和感が強く現れるという現象のことです。上橋さんの他の作品の中には生態系や医学に関わる深い知見を背景にした記述が現れるものがあります。そうした作品を読むときに、たまたま私が持っている自然科学に関する感覚と、作品世界の中での科学技術とその背景の描かれ方との間のわずかな差異に引っかかってしまい、作品世界に没入しにくくなっているような気がするのです。

そして、同じことが現実の科学と社会の関わりについても言えるのかも知れないと思うと、少し怖くなりました。20世紀後半から、社会における行動原理や様々な意思決定の方法について、例えば「根拠に基づく…」という形で、自然科学の方法論に近づけていくことを良しとする傾向が強まっているように思われます。しかし、ヒトが感情や自由意思を持つ限り、社会の行動原理と自然科学の行動原理が一致することはないはず。にも関わらず、二つの行動原理を近づけて互いに「よく似ているが非なるもの」になってしまうと、社会の構成員は自然科学や科学技術の方法論に対して強い違和感や嫌悪感を持ってしまうということになりかねません。

私たちが生きる社会における行動原理や価値観の中に、自然科学とは異なる軸をしっかりと打ち立てることこそが、逆説的に、科学と社会との間の関係を健康かつ良好に保つために必要なのかも知れません。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpretor.c.u-tokyo.ac.jp>

ききんの き

寄付でつくる東大の未来

第35回

渉外部門
シニア・ディレクター 高橋 麻子

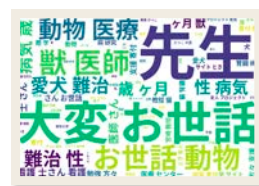
「寄付者ってどんな人？」分析報告会

東京大学150周年を見据え、2022年度4月よりファンドレイジング戦略策定のための分析チームを立ち上げました。情報学環の渡邊英徳研究室と経営企画部IRデータ課の協力のもと、東京大学基金の既存寄付者データ解析に取り組んできました。8月31日には「寄付者ってどんなひと？データで紐解くファンドレイジングのヒント」として全学対象の報告会を開催しました。驚きと衝撃、ワクワクが詰まった報告会の様子を紹介します。

最初に私から「ファンドレイジング戦略の考え方と150周年キャンペーン目標ロードマップ」、渉外の高橋里沙（アソシエイト・ディレクター）より「東大基金の寄付獲得状況とターゲット分類」について報告をし、過去5年間の分析結果から、150周年の目標達成（基金残高80億円を200億円に）には、現在の約3倍のステークホルダーと活動規模が必要と試算できること、限られた体制を支えるデータ分析とIT活用は不可欠であることを伝えました。IRデータ課の堀川優弥氏の発表「機械学習を用いた寄付者のクラスタリング」では、寄付者の共通点の分析から、よりアプローチを集中すべき寄付者のペルソナ像を提示いただきました。

渡邊研究室の原田真喜子氏（特別研究員）とシン・テンカ氏（博士課程）は、「寄付データを俯瞰するビジュアライゼーション」として、寄付行動、共感要素、キーワードのつながりや類似性の可視化をおこない、ファンドレイザーが捉えていなかった客観的な事実と寄付集めのヒントを与えていただきました。渡邊英徳教授からは「寄付データのジオビジュアライゼーション」として、おそらく日本初である寄付情報のジオマッピングが紹介されました。あらゆるオープンデータと重ねて見ることで、潜在寄付者や大口寄付者の推測に大いに活用できる報告がありました。

ウェビナー形式の報告会には、学内の様々な部局から80名以上が参加いただき、最後の質疑応答ではファンドレイジングのアイデアや、卒業生の寄付を伸ばすため必要なことなど、多数の意見がでて活発な議論ができました。今後は、さらに寄付者の共感の心理と行動の理解を深めることと、学内の協力と連携をすすめるながら、より実行力のあるファンドレイジング戦略を組み立てていきたいと思えます。



東大VMC基金のきっかけコメントのテキストマイニング

東京大学基金事務局（本部渉外課）

※動物医療センター

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
8月18日	本部環境安全課	令和4年度「東京大学安全の日」講演会を開催
8月18日	本部環境安全課	第6回東京大学環境安全衛生スローガン募集を実施
8月19日	本部渉外課	遺贈寄付パンフレットができました
8月24日～9月7日	農学生命科学研究科・農学部、先端科学技術研究センター、医学部附属病院、先端科学技術研究センター、大気海洋研究所、工学系研究科・工学部、東京カレッジ、情報基盤センター、生産技術研究所、公共政策大学院、宇宙線研究所、広報室	ジュニア・スタッフ・イベント 超短時間雇用モデル 多様な人「財」の確保・育成に向けて地道に 出産・育児等に関する職場環境の整備について インクルーシブ・アカデミア・プロジェクト D&I向上のための短期的・長期的取り組み インクルーシブデザインスクール 見学旅行 女性研究者と女子中高生の交流イベント ユーザリサーチャー制度 国際女性デー関連イベントの実施 どこでもキャンパスプロジェクトにおけるアクセシビリティ向上のための情報技術検討 学生ファースト! 当事者研究 外国人学生・研究者と構成員の交流促進 重度の障害がある留学生の受入について 研究者のダイバーシティを推進する取組 / UTokyo D&I アクションとメッセージ
8月25日	本部学生支援課	自転車部競技班が全日本学生選手権チームタイムトライアル大会で優勝!
9月1日	宇宙線研究所	スペインとハイパーカミオカンデ実験についての覚書を締結
9月6日	総合文化研究科・教養学部	広域科学専攻の磯崎行雄名誉教授が Island Arc Award を受賞
9月9日	広報室	PwCコンサルティング合同会社 馬越美香様 SDGインパクトジャパン 小木曾麻里様 音楽家/数学研究者 中島さち子様 UTokyo D&I 応援メッセージ
9月13日	広報室	広報誌「淡青」45号を発行

テエベス百門の断面図——歿後100年記念 森鷗外旧蔵書展を開催します

(総合図書館)

今年、令和4(2022)年は大正11(1922)年に森鷗外が歿してから、ちょうど100年となります。これを記念して、森鷗外旧蔵書「鷗外文庫」を所蔵する総合図書館では、「テエベス百門の断面図——歿後100年記念 森鷗外旧蔵書展」を開催します。

鷗外文庫所蔵資料の展示は、これまでにも総合図書館で2度、柏図書館で1度行われていますが、今回は従来出展されたことのない資料を多数展示する予定です。

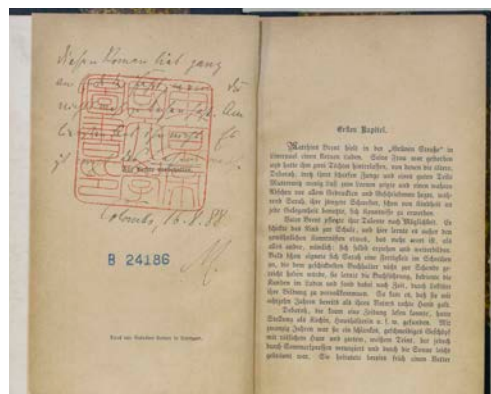
実に約120年もの間、蔵書のペー

ジにはさまって眠っていたある資料(詳しくは展示をお楽しみに!)や、「舞姫」のエリスのモデルとなったドイツ時代の恋人、エリーゼへのメッセージが記されたドイツ語小説集、自分で雑誌から切抜いて製本した夏目漱石・幸田露伴らの小説集など、貴重な資料が目白押しです。

会期は本年10月13日(木)から11月28日(月)の予定です。みなさま、この機会にぜひご

来観くださいませ。

展示会 Web サイト →



Ein einfach Herz : ein Roman aus dem Leben (請求記号 鷗 E200:3357)「森鷗外がエリーゼに与えたと伝わるメッセージ」

ダイバーシティ&インクルージョン宣言制定記念シンポジウムを開催します

(男女共同参画室)

東京大学ダイバーシティ&インクルージョン(D&I)宣言を広く知っていただくため、10月15日(土)に行われるホームカミングデイのプログラムとして記念シンポジウムをオンラインで開催します。開会の挨拶は藤井輝夫総長が、閉会の挨拶は林香里理事・副学長が行い、総務司会は矢口祐人副学長が務めます。

第1部では、D&I宣言WG座長の高野明相談支援研究開発センター教授と小川真理子男女共同参画室副室長が、D&I宣言とD&Iに関連す

る様々なデータや国内外の他大学との比較分析を通して、本学のD&Iの現在地を確認します。

第2部のパネルディスカッション「D&I宣言の実現に向けて～多様な立場と経験から学ぶ～」では、ジェンダー、LGBTQ、グローバル、障害などの様々な立場の知見や経験を持つ本学関係者の内なる多様性を掛け合わせた対話を行い、本学のD&Iの未来に向けて考えます。

右のQRコードから詳細を確認してお申し込みください。



パネルには、相原博昭(理事・副学長)、李美淑(情報学環准教授)、Woodward Jonathan(総合文化研究科教授)、近藤武夫(先端科学技術研究センター教授)、星真梨子(株式会社JobRainbow 取締役 COO)の各氏が登壇します。

※「学内広報」では広告掲載を受け付けていません。出稿を検討したいという皆様のお問い合わせをお待ちしております。↓本部広報課（03・5841・2031）



CLOSE UP 自転車部競技班が全日本学生選手権で優勝!

(本部学生支援課)



(上)疾走する4選手 (下)自転車部競技班



全日本学生選手権チーム・ロード・タイムトライアル大会は、約16kmの特設コースを2往復、総距離63.2kmを1チーム4人で出走し、各チームの3番目の選手のタイムを競う競技です。個々の走力は勿論、メンバー間での風除けとなって先頭を走る時間配分やペース配分など様々なことを考慮して走る必要があります。スピードスケートのチームパシュートの自転車競技長距離版と言えます。

東大チームは、前年度優勝の中央大学を9秒上回るタイムで1往復目から駆け抜け、最終的には2位の朝日大学に2分以上の差をつけ、1時間17分（平均49.24km/h）のトップタイムでゴールしました。

この快挙と併せ、全日本学生選手権個人ロードレース大会で篠崎蒼平さんが8位に入賞したことで、ツール・ド・北海道国際レース2022への出場が決定しました。

自転車部競技班副将の篠崎さんは「東京大学史上初の優勝というリザルトを残すことができ大変嬉しく思います。最初はメンバー間の走力の差も大きく、なかなか上手いきませんでした。早朝練習を繰り返し最終的には優勝できました。こういった結果を残すことができたのも日頃からのOBOGを始めとした支援してくださっている皆さまの御陰です。ますますの応援のほどよろしく願いいたします」とコメントしています。



CLOSE UP 安全の日講演会とスローガンコンテストを実施

(本部環境安全課)



併催された第6回東京大学環境安全衛生スローガンコンテストの表彰式より。教養学部・小林雄太さんの作品「学問の灯火守る火の用心」が総長賞を受賞し、教養学部・佐藤良祐さんの「火は消えても、一生消えないものがある」が理事賞を受賞しました

本学では、平成17年に部局のリサーチフェローが潜水作業中に亡くなる事故が発生した7月4日を「東京大学安全の日」と定め、記憶を風化させることなく、教育研究活動における安全衛生の向上、事故災害の防止及び安全意識の向上を図るため、毎年この時期に講演会を実施しています。令和4年度の講演会は7月5日に「大学における火災リスクの低減」をテーマにオンラインで開催しました。

藤井総長の開会挨拶では、「全面的に対面講義が再開され、キャンパスの活気が取り戻されつつあるが、一方で、学内における事故災害リスクは高まっている」、「リスク軽減のため、構成員一人ひとりの意識を向上させることが大事」と講演会の意義が述べられました。齊藤理事からは、「東日本大震災以降、

地震を中心とする大規模災害に対しての様々な対策が取られてきたが、昨年8月の大規模火災を機に改めて防火対策を検討する必要がある」と防火対策の重要性が説かれました。

講演会では、環境安全本部企画調整部長で工学系研究科の土橋侗教授が「火災予防と火災時の対応の基本」について、環境安全本部の黄倉雅広助教が「令和3年度事故災害報告」について話し、東京消防庁本郷消防署の宮川克広署長は「火災発生要因からみる火災低減方策について」、環境安全研究センター長の辻佳子教授と工学系研究科の茂木俊夫准教授は「火災を知って、火災を防ぐ。その教育手法の在り方」と題してそれぞれ講演しました。

今回の参加者は昨年より大幅に増えて約450名でした。



CLOSE UP 広報誌『淡青』45号を発行 (広報室)

表紙は低温科学研究センターの液体ヘリウムタンクです



東京大学広報室が年に2回発行している広報誌『淡青』の最新号ができあがりました。

今号の特集は「素朴な疑問vs東大」です。目指したのは、「なぜ？」から始まる学術入門。老化に食べ物、魚類に植物、日用品から言葉の問題まで、私たちが暮らしの中で感じそうな21の疑問をリストアップし、

その分野に詳しい学内の先生を選んで、各々の専門分野の観点から答えてもらいました。疑問に紐づける形で自身の研究内容についても紹介してもらいました。なんとなく知った気であるけどいざ聞かしてみるとはっきり答えられないような身近な疑問を足がかりに、研究者の世界を覗いてみませんか。

表紙について／

UTokyo Green Transformation ロゴ

東京大学のシンボルである銀杏（イチョウ）の黄色と淡青色が回転して交じり合わさり、グリーンが現れる様子を描くことで“Green Transformation”を視覚的に表現したものです。また、東京大学の象徴であるイチョウが原型を残しながら、変化をしていく様を、東京大学のGXにかかる積極的な姿勢を表現しています。学内におけるGXの関連活動において、本ロゴをご活用ください。





Professional means

先日、10年程前に所属していた研究グループの同窓会に参加した。当時の研究を続け大きく発展させている人、全く異なる研究テーマを始めた人など、良い意味で10年の時の流れを感じた会であった。その中に、自らの専門分野を生化学からバイオインフォマティクスに転換し、キャリアアップを果たしたメンバーA氏がいた。自身の研究を進める傍らで、自ら学びなおしたそうだ。甚く感心してその経緯を聞いたところ、予想外の答えが返ってきた。前勤務先で専任技術職員が複数名常駐する研究支援部門に出入りしているうちに、バイオインフォマティクス担当者と親しくなると、手解きを受けたという。師事は数年間にわたり、近年は自らがインフォマティシャンとなったA氏と部門とで、データ解析ツールの共同開発などにも至っているそうだ。

A氏曰く、仮に先方が研究所専任の常勤職員でなく、研究室単位で雇用された任期付き技術職員であれば、難しかっただろうとのこと。職員の任期の問題もあるし、自身が雇用されている研究室の業務に多忙な中で、ボスの指示でもないのに、他所の研究室の一介の研究員に自らの技術を支援のレベルを超えて惜しみなく提供してくれるということは、まず起こり得ないのではないか。もちろんA氏の類稀な性格と才能あってこそそのエピソードだが、大学のように人材の流動性が高い学術研究機関において、高い専門性を有する技術職員が主体的・安定的に働ける環境整備の重要性とその潜在的な波及効果を再認識した次第である。

ここで、今こそすべての本学構成員に問う。「高い専門性 (Professional/Professionalism)」とは何か？

Professional

- relating to work that needs special training or education.
- having the qualities that you connect with trained and skilled people.

(Cambridge 英語辞書より)

私がかつて在籍していたアメリカの某州立大学には、実験機器の修理やカスタマイズを一手に引き受けるベテラン専任技術職員 (エンジニア) がいて、彼の作業部屋の壁にはこう書かれていた。時々思い出しては、自身がいくつ実践できているかを自問自答している。

Professional means:

- P: proud
- R: reliable/respect
- O: orderly
- F: fair
- E: efficient
- S: safe
- S: supportive
- I: informing
- O: organized
- N: negotiable
- A: ambitious
- L: loyal

岡田由紀

(定量生命科学研究所)

